令和元年度　歴史シンポジウム

# 古墳をつくった人々

## ～墓制から文化の多様性を探る～

## - 資料集ー

令和２年１月２６日（日）

ウエルネス交流プラザ　ムジカホール

都城市教育委員会 文化財課

## シンポジウム開催にあたって

都城市教育委員会では、都城の歴史をより多くの市民の皆様に知っていただくために、平成２２年度から、学校への出前授業や企画展を開催するなど、さまざまな取り組みを行っており、この歴史シンポジウムもその一環として行っております。

今回は、「古墳」をテーマに開催します。昨年７月に世界文化遺産に登録された百舌鳥・古市古墳群では、日本列島各地の古墳の規範となる前方後円墳や円墳があります。ここ都城盆地の古墳文化に目を向けますと、盆地内でも多くの種類の古墳が見つかっており、全国的にも珍しい地域です。

本日は、元宮崎県埋蔵文化財センター所長の北郷泰道様と鹿児島女子短期大学教授の竹中正巳様、奈良県橿原考古学研究所附属博物館学芸課長の吉村和昭様を講師にお迎えして、古墳時代の都城について紹介していただきます。このシンポジウムを通して、1,500年前の都城盆地の興味深い歴史文化に思いを馳せていただければ幸いです。

都城市教育委員会
教育長　児玉　晴男

## 令和元年度　歴史シンポジウム「古墳をつくった人々」日程

12:40　開場
13:00　開演・開会行事
13:15　講演　北郷泰道（元宮崎県埋蔵文化財センター所長）
　　講演　吉村和昭（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館学芸課長）
　　講演　竹中正巳（鹿児島女子短期大学教授）
14:35　シンポジウム「古墳をつくった人々～墓制から文化の多様性を探る～」
　　コーディネーター　平山淳子（ＭＲＴ宮崎放送ラジオパーソナリティ）
15:30　閉会

（敬称略）

# 「“諸県君と髪長媛”伝承の地の古墳文化」

北郷泰道

## 1　「前方後円墳の時代」と「前方後円墳体制」

古墳時代を、「前方後円墳の時代」（近藤義郎）と前方後円墳に象徴するのは、前方後円墳を首長墓として捉え、首長の個人的権威・権力の現れとしてだけではなく、首長が統括する地域集団の経済力・政治力を示すものであり、その規模の大小の盛衰は、地域社会の勢力実態を現すと考えるからである。

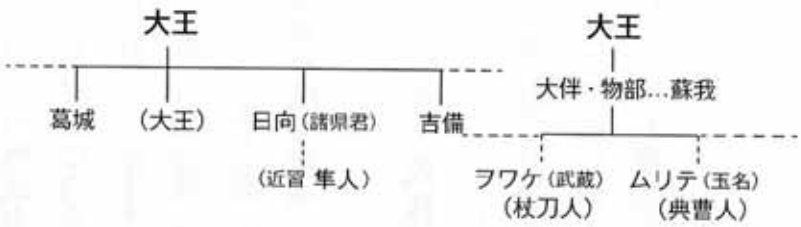
「前方後円墳体制」（都出比呂志）として、最上位に前方後円墳、ついで前方後方墳、円墳、方墳、土壙墓など、またそれぞれの規模の大小の序列に社会体制が示されているとした。しかし、それは体制ありきではなく、列島弧各地における墳墓の築造が、地域豪族・社会の経済力・政治力を示すものとして「見える化」され、地域間の関係性が相互認識されることで、序列化が整備されたと理解する。例えば、東国（茨木県･栃木県）においては４世紀代を中心に、大型の前方後方墳を築造し続けたし、出雲（島根県・鳥取県）においては、規模の大小ではなく、方墳や前方後方墳など方形の墳墓に自らのアイデンティティーを示した。

つまり、５世紀前半代までは、こうした地域豪族の存在が示すように、畿内王権、畿内豪族も含め、それぞれ並列的位置での「連合体制」であった。

そして、稲荷山古墳出土金象嵌鉄剣銘（埼玉県行田市）、江田船山古墳出土銀象嵌鉄刀銘（熊本県玉名郡和水町）が示すように、５世紀後半の雄略天皇（獲加多支鹵大王）の時期に、大王のもとに人制（杖刀人・典曹人など）として、地域豪族が組織的役割を担う「集権体制」へと整えられ始めていたことが知られる。

従って、前方後円墳の存在を示し「畿内王権の影響が及ぶ」「畿内王権との密接な関係・繋がり」とする常套句の実体は、それぞれの豪族の主体的位置と時期ごとに大きく異なる。かつ、その実体を叙述してはじめて、前方後円墳存在の歴史的意味を理解することになる。

前期古墳の地域性




畿内政権の構成

## ２　前方後円墳

### １）成立と展開

前方後円墳は、奈良盆地・纒向の地（奈良県桜井市）において定型化された墳墓として誕生した。前史には弥生時代の墳丘墓から、陸橋として掘り残された周溝の一部が、「首長霊継承儀礼の場」（近藤義郎）として方形の墳丘を成し、「纒向型前方後円墳」（寺沢薫）として築造された。初期的には小規模であった方形の墳丘が、埋葬施設を持つ円形の墳丘に相当する規模に築造された時、すなわち箸墓（奈良県桜井市）の築造を最初の前方後円墳とする。

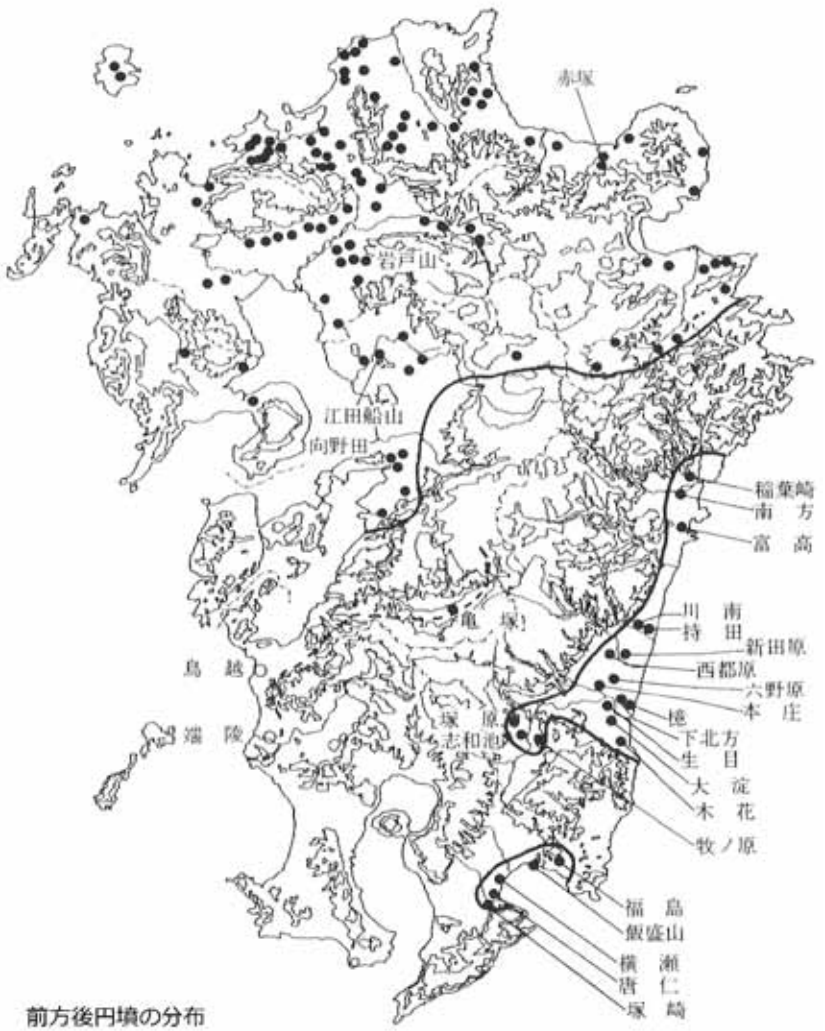
前史を継続的に引き継ぎ、各地に纒向型前方後円墳は築造され、宮崎県下では檍１号墳（宮崎市）や西都原古墳群 81 号墳（西都市）などが、３世紀後半代～４世紀初頭には築造された。前方後円墳の出現は、それに継続して、西都原古墳群をはじめ、稲葉崎神社古墳（延岡市）、持田古墳群１号墳（計塚、高鍋町）、生目古墳群１・３号墳（宮崎市）などが築造され、古墳群が形成されていった。

宮崎県下での古墳の発掘調査例は少ない。それは、戦前・戦中に古墳のほとんどが県指定・国指定の史跡とされ、保存を前提に発掘調査が制約されたためである。こうした指定がなされたのは「皇国史観」のもと、古墳の存在が天皇家につながると考えていたためで、こうした指定行為に政治的・思想的拘束があった。また、古墳という存在が、日本国家の形成期の証言者と見られていること、それが古墳時代の性格・位置付けでもある。

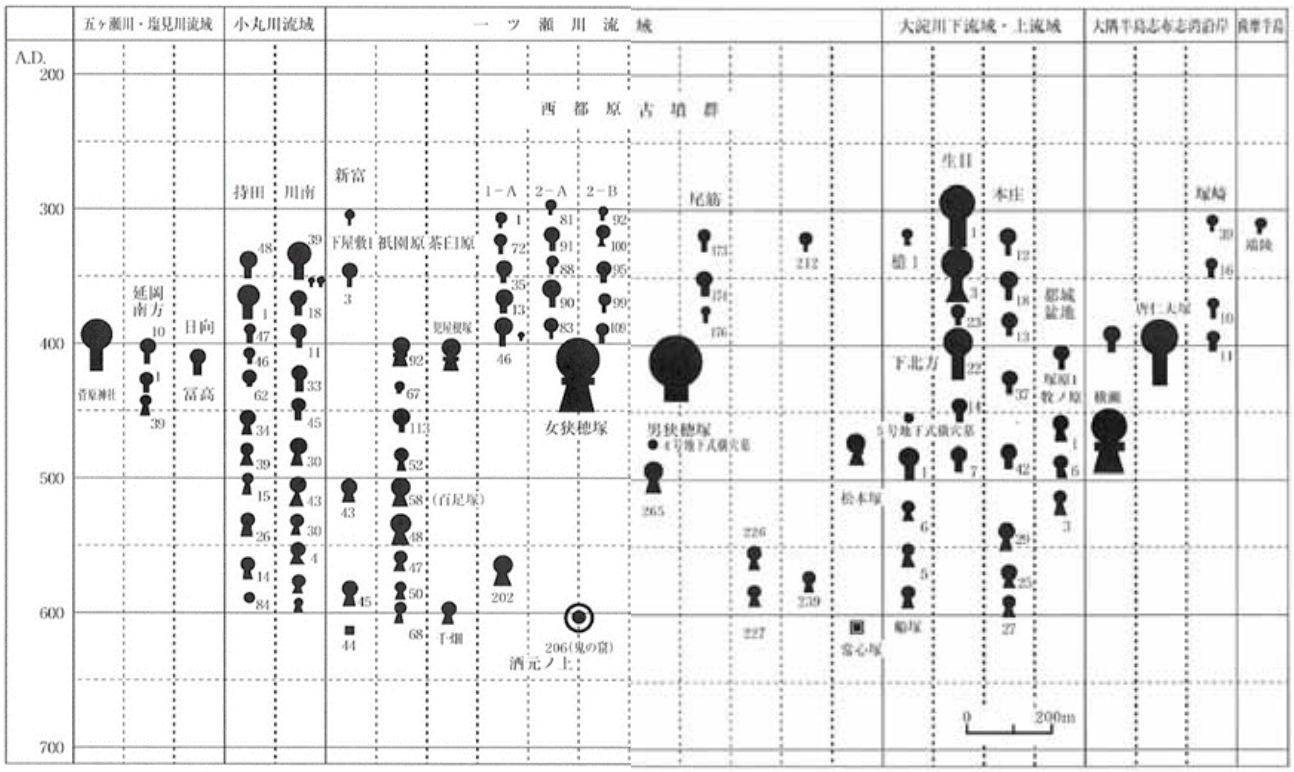
### ２）分布圏

北部九州、佐賀関（大分県）から阿蘇（熊本県）、八代平野北部（熊本県）を結ぶ以北には、ほぼ満遍なく前方後円墳が築造されている。それに対し、以南の南九州での前方後円墳の分布は、日向灘沿岸の平野部、大隅半島では志布志湾岸の平野部にほとんど限定され、唯一内陸部に成立するのが都城盆地の北辺である。野尻・小林盆地、えびの盆地に築造されるのは円墳で、前方後円墳は存在しない。こうした分布を先の常套句のみで理解することはできない。

なお、朝鮮半島の南部（加耶・百済南部）には、頻繁な相互交流を示す倭系の埋葬施設や副葬品を持つ古墳が存在する。しかし、墳形に前方後円墳を採用するのは、西南部の旧馬韓・百済の地域、栄山江流域に限られる。現在までに 15 基を数え、５世紀後半から６世紀代に、月桂洞（光州市）では２基が隣接して築造されているが、１基単独に築造されることがほとんどである。



前方後円墳の分布




日向における前方後円墳の変遷

３）副葬品

副葬品としては、中国大陸の歴代国家は銅鏡をもたらしたし、朝鮮半島の国々とくに新羅・百済そして加耶から、鉄製品製作のための鉄素材の供給も含め、武器・農工具等の鉄製品、須　恵器の誕生の前提としての陶質土器、金製・金銅製装身具（冠・耳飾りなど）などを入手していた。逆に、硬玉の勾玉は、列島から提供されていた。

鏡、装身具、石製品、武器、武具、馬具、農工具、土器など、多種多様な品物が副葬されるが、時期ごとの傾向を示しつつ、それらの組み合わせや種類に被葬者の政治的社会的位置付けを見ることになる。中でも石製品は、祭祀的性格から、地域的･時期的に限定的な傾向があり、南九州では車輪石片が板平遺跡（日向市）で確認されているだけである。それに対して、大量の武器・武具が見られるのは（発掘調査例としては地下式横穴墓に顕著であるが)、南九州の軍事的役割が重きをなしたことを示している。

## ３　地下式横穴墓

１）成立と展開

地下式横穴墓は、古墳時代が始まり１世紀以上経過した４世紀末ないしは５世紀初頭に誕生した。その誕生の時期には、大きな意味がある。

古墳は、竪穴系埋葬施設（竪穴式石室など）ではじまるが、４世紀後半に老司古墳・鋤崎古墳（福岡市）のように横穴系埋葬施設（横穴式石室など）が、朝鮮半島を経由して列島に及ぶ。縦方向に掘り・構築し、全体が埋め戻される構造から、横方向に掘り・構築し、入口部分のみ閉塞する構造の導入は、追葬を可能とする。

横方向への埋葬施設のアイディアは、構築する石室だけではなく、穿つ墓室（玄室）を創案する。その初期形態は、縦方向の土壙墓の底面から埋葬部を横方向に掘り広げ、天井部の下に墓壙を穿つ、横口式土壙墓として現れる。

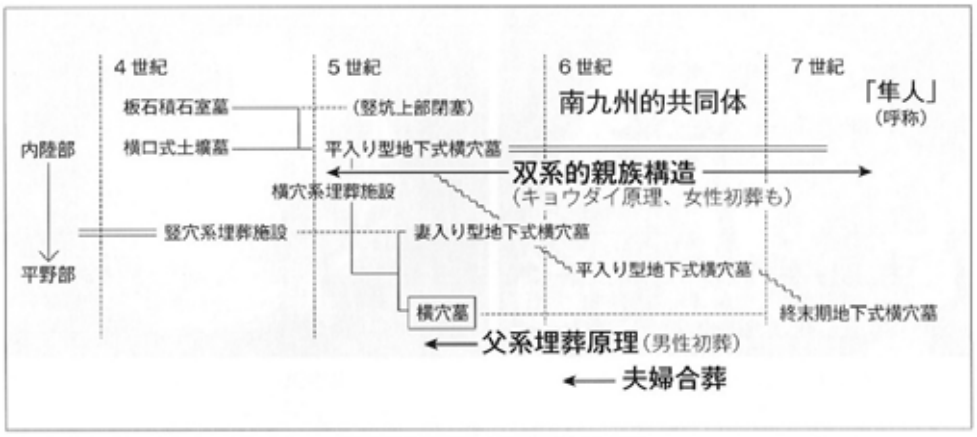
そして、火山灰台地の優勢なえびの盆地で、縦方向に竪坑を掘り、その底面から横方向に羨門・羨道・玄室（平入り）を構成することで、地下式横穴墓として定型化される。さらに、前代から存在する板石積石室墓を閉塞に採用した竪坑上部板石閉塞（狭小な竪坑入口）から羨門板石閉塞、土塊閉塞（竪坑の拡大）

へと変遷する。

玄室は、家屋に見立てられ、旭台・日守（高原町）、大萩（小林市野尻町）などでは、浮彫や線刻で、妻側に束柱・斗、平側には垂木、天井に棟木を表現するものもある。軒先を表現したものであるが、壁上面に副葬品が置かれることがあり、棚状施設と呼ばれている。

２）形質人類学と親族構造

地下式横穴墓は、玄室が空洞であることから被葬人骨の保存状態が良好で、土に埋もれて人骨が消滅する地域の古墳からは得ることの出来ない、多くの具体的情報を提供する。被葬者と副葬品の関係、女性にも武器類が副葬される多くの例、副葬品の所属関係から見る被葬者の政治的社会的性格・地位、そして、被葬者の形質的特徴から平野部の長頭・高顔（目の位置が高い）、内陸部の短頭・低顔（目の位置が低い）の傾向が強いこと、などである。



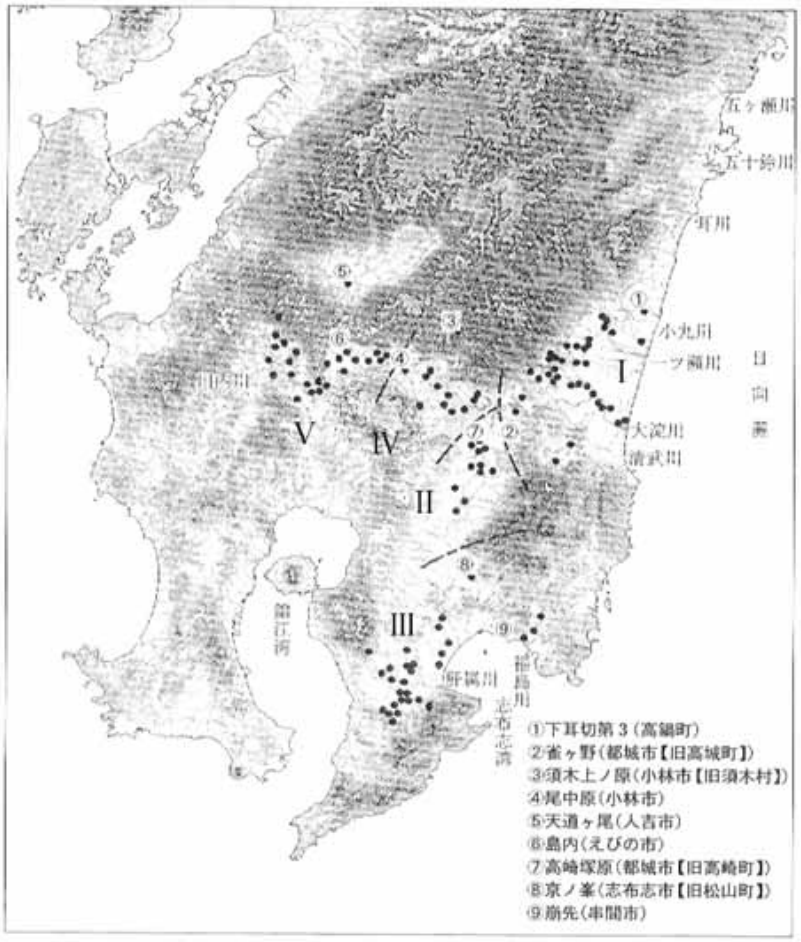

地下式横穴墓と親族構造の変遷

また、血縁関係を遺伝的形質からみる親族関係の解明は、埋葬思想の変革も伴い、単体埋葬（一施設一被葬者）から複数埋葬（一施設複数被葬者）へと、また親族構造を視野にすれば、個人単体埋葬からキョウダイ原理（配偶者を含まない）の複数埋葬へ、さらに配偶者を伴う家族埋葬へと、社会構造の変化にも連関することになる。

地下式横穴墓は、男性初葬・女性初葬の両者があり、配偶者を追葬せず、キョウダイが追葬される双系（非単系）、一方、５世紀の後半に登場する横穴墓は､男性（家長）の死により造墓（男性初葬）が始まる父系（単系）に親族構造が整理されていったことが知られる。

３）分布圏

穿つ墓室のアイディアは、平野部へと時間差を置かず広がり、生目古墳群に見る長大な横口式土壙




地下式横穴墓分布図

副葬品のセット関係からみた地下式横穴墓

| 分類 / 地域 | A | | | | B | | | C | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | A | | B | | | | | | | |
| | a | b | a | b | a | b | c | a | b | c |
| 第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地域 | 六野原10号（農工具）<br>下北方5号（農工具）<br>六日町・松原塚南 | 西都原4号<br>六野原8号（農工具）<br>本庄・六日町<br>宗仙寺・猪塚南 | | 下北方4号（農工具）<br>北神原4号 | | 本庄小学校<br>六野原1号（農工具）<br>木脇・塚原2号（農工具）<br>祓川 | 北神原5号（金銀・鈴）<br>十日町・樽塚南（鈴）<br>西都原1号 | 本庄小学校2号<br>大坪（貝輪・農工具）<br>大崎町・竜相（貝輪）<br>市ノ瀬5号（貝輪） | 桃木畑〈六野原〉<br>築池 | 元地原5号（農工具）<br>月中1号（貝輪）<br>桃木畑〈六野原〉<br>飯盛<br>高山・前田1号<br>井水1号<br>市ノ瀬1号（貝輪）<br>〃 9号 |
| 第Ⅳ・Ⅴ地域 | 島内139号 | | 小木原2号 | 大萩27号（貝輪）<br>馬頭1号 | 小木原3号 | 島内1号<br>〃 3号<br>小木原2号 | 久見迫6号<br>馬頭5号<br>〃 13号<br>〃 14号 | | 東二原 | 須木・上ノ原9号<br>日守1号（貝輪）<br>〃 2号（〃）<br>仮屋尾（〃）<br>〃（〃）<br>島内5号（〃）<br>〃 7号（〃）<br>小木原101号（〃）<br>大萩14号（〃）<br>〃 21号（〃）<br>〃 34号（〃） |

A｛a 甲冑・馬具・鏡・玉類／b 甲冑・――・鏡・玉類｝
B｛a ――・馬具・鏡・――／b ――・馬具・―・玉類｝

B｛a 甲冑・馬具・―・――／b 甲冑・――・―・――／c ――・馬具・―・――｝

C｛a ――・――・鏡・玉類／b ――・――・鏡・――／c ――・――・―・玉類｝

墓も出現し、妻入り・単体埋葬の地下式横穴墓として成立する。これらは、前方後円墳に代表される古墳の埋葬施設･単体埋葬を引き継ぐため奥行の長い妻入りの形状を採り、なかには玄室中央に屍床を掘り窪め、その両端に人頭大の石を配列するものなど、古墳の埋葬思想への強い意識性・共有性が示される点、内陸部の地下式横穴墓と大きく異なる。

こうして平野部では継続して築造されるが、６世紀に入ると、平入り・複数埋葬へと変化し、古墳時代終末期には、横穴墓の墓道を取り入れ、長大な二等辺三角形状の墓道（竪坑の痕跡を床面に残すものも）から羨門・羨道・玄室を構成するものが、西都原古墳群の一角の酒元ノ上や牛牧（高鍋町）などに現れる。

地下式横穴墓は、薩摩半島側には存在せず、九州島東南部に限定的に分布する。

４）副葬品

副葬品では、前方後円墳に匹敵する副葬品を有する地下式横穴墓も存在する。

平野部と内陸部では、土師器・須恵器を玄室内に副葬する平野部と、土器類を玄室内に副葬せず、群内の共有空間に供献する内陸部など、祭祀意識の違いがみられる。また、甲冑・馬具・鏡・玉類に着目すると、その副葬には地域的傾向が見られる。そうした傾向に、地下式横穴墓社会の性格を読み取ることになる。

## ４　横穴墓

１）成立と展開

横穴墓は、地下式横穴墓の台地地形に竪坑を掘り、穿つ玄室のアイディアを受けて、５世紀後半、周防灘沿岸の竹並横穴墓群（福岡県行橋市）、上ノ原横穴墓群（大分県中津市）など、丘陵地の中腹に掘り窪めるため、竪坑ではなく緩やかな傾斜を持つ墓道を成し、羨門・羨道・玄室によって構成される。列島各地に広がり、６世紀中頃には東海地方、７世紀には東北南部まで広がり、８世紀中頃には終焉する。

宮崎県下には、北部の高千穂町の春姫登横穴墓群は５世紀末までには築造され、６世紀前半には南平、吾平原など築造が広がるが、南下して蓮ヶ池横穴墓群（宮崎市）が形成されはじめるのは６世紀後半のことである。そして、大淀川流域の平野部を南限として、内陸部には展開することはなかった。

先の終末期地下式横穴墓の成立は、こうした横穴墓の変遷の中にある。

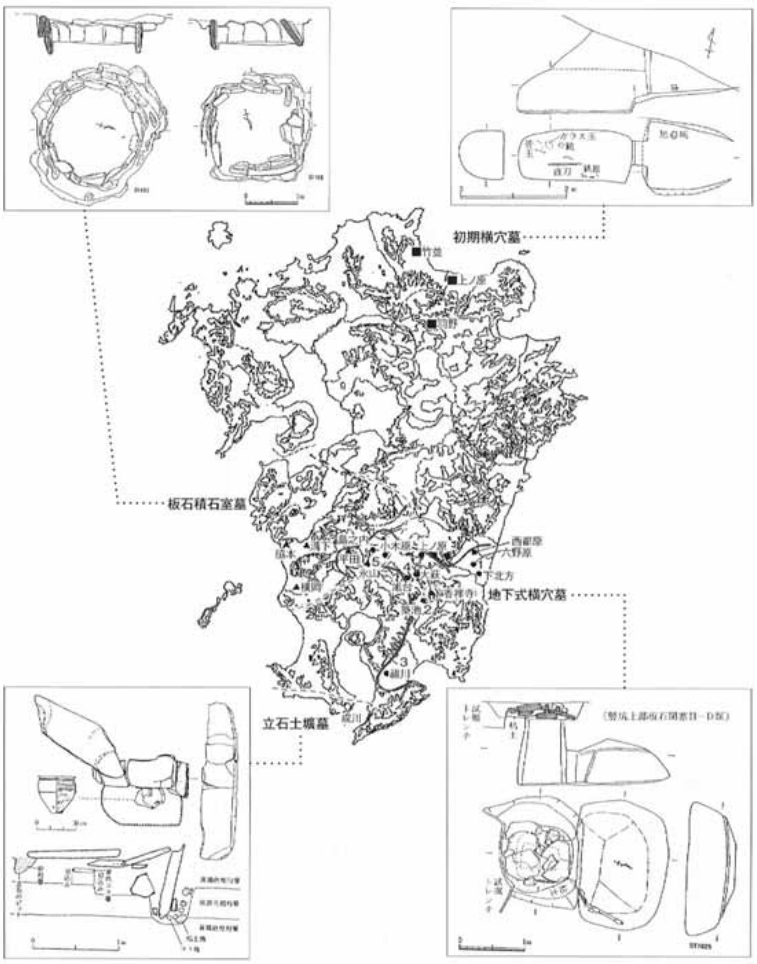
酒元ノ上の終末期地下式横穴墓の上に、円墳が成形された例が確認されたように、蓮ヶ池や池内では、横穴墓の位置する丘陵が前方後円墳や円墳に見立てられ、あるいは成形された例が見られる。

また、蓮ヶ池 53 号墓では、葬送の船・人物、そして鬼面を描いた線刻壁画が確認されている。広原では葬列、土器田(宮崎市佐土原町)では連続三角文(多色)・馬・鳥を描くなど、壁画を描く例も少なくない。

なお、朝鮮半島の西南部で、前方後円墳と同じく、地下式横穴墓・横穴墓が築造されていたことが知られ始めている。戦前の調査例は、単独での発見・調査で、広く認識されることがなかったが、20 基を超えて群を構成した丹芝里遺跡（公州市）の発掘調査で、再認識されることになった。ただ、前方後円墳の分布と異なるのは、百済の都・公州周辺であることである。

２）副葬品

武器類（鉄剣・長刀・鉄鏃）、馬具類、農工具類、銅鏡、装身具類（玉類、耳環）、須恵器・土師器など、銅鋺（かなまり・仏具の一種）が池内（宮崎市）から出土している。




［中央］在地墓制の分布　［右上］初期横穴墓（竹並Ａ－23号）（行橋市教育委員会『竹並遺跡』1977年）
［左上］板石積石室墓（蔵地下式横穴墓Ａ地区SI103・105）（えびの市教育委員会『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第６集 1990年）［左下］立石土壙墓（成川遺跡）（鹿児島県教育委員会『先史・古代の鹿児島』資料編 2005年）［右下］地下式横穴墓（蔵地下式横穴墓Ａ地区ST1025）

在地墓制の分布

## ５　板石積石室墓

１）成立と展開

支石墓は、紀元前 500 年頃から朝鮮半島において盛んに営まれ、縄文時代晩期から弥生時代前期に九州西北部を中心に広がっている。支石墓の埋葬施設は、土壙墓や石棺墓など単一ではないが、上部を形作る天井石と支石が省略され、埋葬施設であった石棺墓が九州北西部から瀬戸内海沿岸へと広がっていく。北部九州では、代わって甕棺墓が主流となり、南部の有明海沿岸を中心とした地域で、円形・方形に側石を立て、持ち送りでドーム状に天井石を積み上げ石室を形作る板石積石室墓へと展開していく。

４～５世紀に、九州西南部の沿岸部から内陸部へと拡がった板石積石室墓は、川内川上流域の大口盆地・えびの盆地では、多くの場合２・３基から十数基の小規模な群を形成し、そして都城盆地の香禅寺では１基が確認されている。しかし、中には永山（鹿児島県湧水町）や大住（鹿児島県伊佐市）は 100 基ほど、球磨川を遡った荒毛（熊本県人吉市）では 150 基を超えて群を形成していると推定されている。

なお、「横穴式石室系板石積石棺墓」と名付けられた特殊な形態が、島内（えびの市）で確認されている。

２）副葬品

副葬品は、地下式横穴墓と比べて多種多量ではなく、少量の鉄剣・直刀・鉄鏃の武器類を保有するのみである。横岡板石積石棺墓群（鹿児島県薩摩川内市）７号墓からは、蛇行剣が出土している。

## ６　土壙墓・立石土壙墓

１）伝統と継続

土壙墓は、亡骸を埋葬する最も基本的な埋葬施設として縄文時代から営まれてきた。ベーシックな長方形の形状から大きな変化をすべくもなく、ただ棺に木や石を用いれば、木棺墓や石棺墓と分類される。

土壙墓は、古墳時代を通じても営まれ、大萩地下式横穴墓群（小林市野尻町）、日守地下式横穴墓群（高原町）の中でも確認されている。調査例は多くはないが、地下式横穴墓や板石石室墓の存在しない錦江湾沿岸から薩摩半島では、亀の甲遺跡（鹿児島県霧島市国分町）のように土壙墓が伝統的な埋葬施設として営まれていたとみられる。

そして、その南端に位置する成川遺跡（鹿児島県指宿市）では、人間ほどの大きさの石を立てた立石土壙墓が見られる。

２）副葬品

少量の鉄製の武器類が伴い、亀の甲では三累環頭大刀が出土している。

## ７　古墳時代の諸県

都城盆地は、内陸部で唯一前方後円墳が築造され、決して適しているとは思えないボラ土を掘り抜いて地下式横穴墓が営まれ、飛び地のように板石積石室墓も存在し、また周辺では土壙墓を営むこともみられる。こうした多様性の意味する歴史とは、何か。

それには、考古資料だけではなく、古墳時代の歴史書と言える『古事記』『日本書紀』を紐解くと、考古資料という物質の核心に、歴史主体としての確かな人間存在を確かめることができる。

４世紀初頭の景行天皇から、５世紀後半の雄略天皇までの時期、繰り返される天皇と日向の女性の婚姻と、皇子たちの誕生・存在は、単なる婚姻関係としてではなく、畿内王権と地域豪族との連合体制から集権体制への歴史を映すものとして、また熊襲・隼人と呼ばれた南九州の人々の実態も鮮明にするのである。もちろん、諸県の地の歴史的実像も、その中に確かに見えてくるのだ。

具体的には、景行天皇と御刀媛の子・豊国別皇子の時期は、生目古墳群に 100㍍を超える大型前方後円墳が３基、築造され続けた時期である。

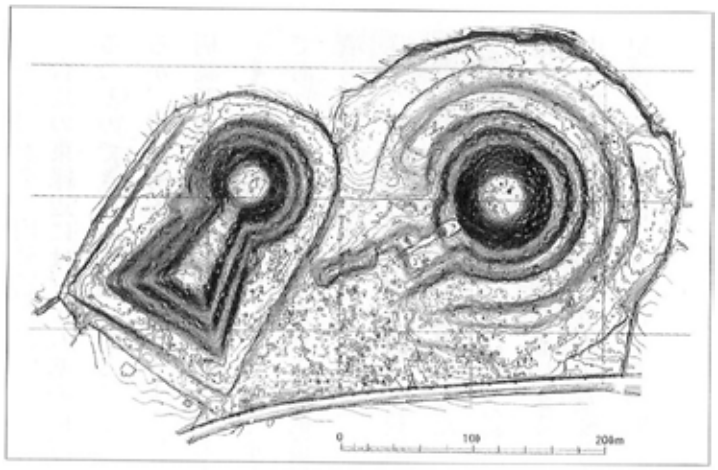
応神天皇と日向泉長姫の子の大葉枝･小葉枝皇子と、それを支える南九州の海人集団、すなわち「ハエ宮家」と近習する集団が「隼人（ハエ・ヒト）」として誕生した時期であり、それは地下式横穴墓が成立する時期となる。

諸県君牛諸井から仁徳天皇と髪長媛の子・大日下（大草香皇子）・若日下（幡梭皇女）にかけての時期は、西都原古墳群に列島最大規模の帆立貝形古墳（男狭穂塚）と列島 48 位・九州島最大規模の前方後円墳（女狭穂塚）が築造された時期である。

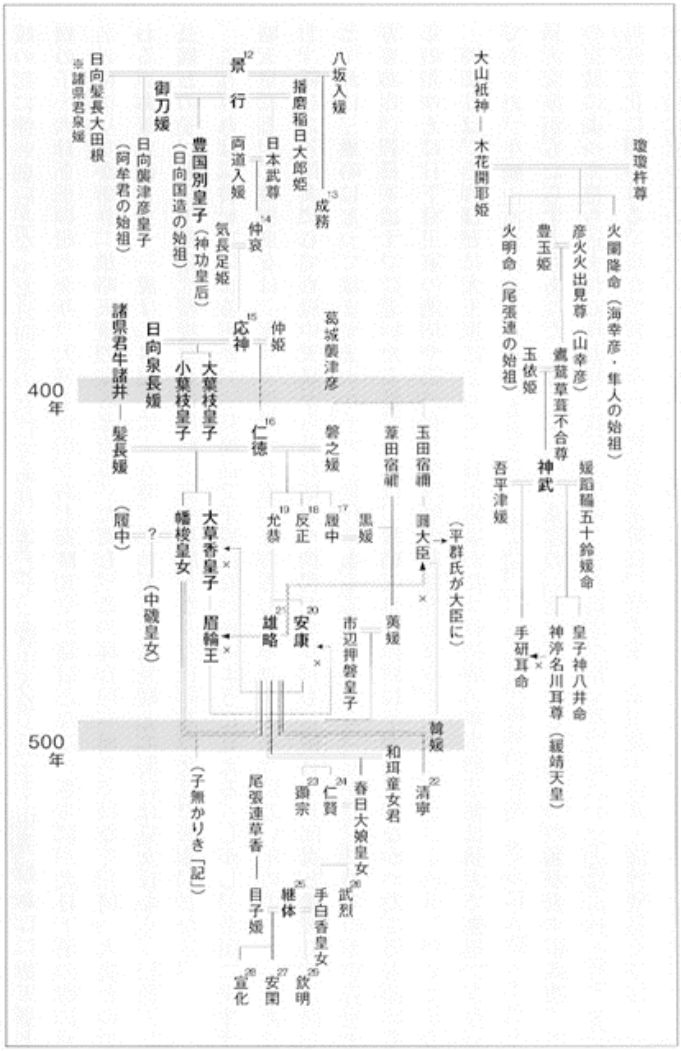
諸県君の系譜は、本庄（国富町）の剣柄稲荷神社の宮司家・宮永氏として父系系譜に繋がると共に、双系系譜として母系系譜を辿れば、景行天皇に大御饗を供する諸県君泉媛、応神天皇妃・日向泉長媛、（諸県君牛諸井）、仁徳天皇妃・髪長媛として内陸部・小林盆地や都城盆地に拠点を置く女性「梟帥」の系譜に繋がる。

また、海上の諸権益・権利（海事・外交・交易など）を掌握する海人としての隼人は、諸県君のもと連合体制を組み、日向系宮家を支えること、すなわち畿内王権に近習したが、日向系宮家の滅亡と共に、畿内王権直轄に組織化されることに対して、つまり律令国家下に組み込まれることに抵抗することになる。

そうした隼人の姿を伝えるのが、的野正八幡宮（都城市山之口）、田ノ上八幡神社（日南市）、岩川八幡神社（鹿児島県曽於市）の弥五郎どん祭りである。




男狭穂塚・女狭穂塚




『日本書紀』にみる大王との婚姻関係

『古事記』と『日本書紀』では后妃・皇子等の人数や名前に違いが見られる。

# 地下式横穴墓に副葬される武器・武具をめぐって

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　吉村和昭

## 1．はじめに

地下式横穴墓は、古墳時代の南九州において築造される独特の墓制である。地表から垂直方向に竪坑を掘り、さらに水平方向に掘り進んで、被葬者やその副葬品を納める墓室（玄室）を構築するという構造をもつ（図 2）。埋葬終了後、墓室は地下の密閉空間となる。そのため、被葬者人骨や副葬品が良好な状態で出土することが多く、ほかの墓制では得られない様々な情報を引き出すことが可能である。地下式横穴墓の副葬品は、墓によってその多寡はあるものの、鉄製品、とくに武器の存在が顕著である。今回はこのような武器・武具について、地下式横穴墓が築造される社会の親族関係との関わりという視点からからみていきたい。

## 2．古墳時代の親族関係と地下式横穴墓

古墳時代中期後半にあたる 5 世紀後半以降、西日本においてはひろく、その親族関係が双系から父系へと転換していくことがあきらかにされている（図 7）。父系の埋葬原理において、墓は成人男性の死を契機として築造される。複数埋葬墓の初葬は成人男性に限られ、主要な副葬品（武器）はこの初葬男性に帰属する（田中 1995・2008 など）。

一方、地下式横穴墓が築造される社会の親族関係は近年まであきらかではなかったが、宮崎県内陸部の西諸県地域にある旭台地下式横穴墓群と立切地下式横穴墓群における歯冠計測分析を含む被葬者分析、またその埋葬の詳細な分析から、5 世紀後半以降もその親族関係が双系にとどまることがあきらかとなった（田中・舟橋・吉村 2012）。さらに平野部、内陸部を問わず、女性が初葬の事例、主要な武器の帰属が初葬の成人男性ではない事例が認められることから、その埋葬原理は父系へとは移行せず、古墳時代末まで双系にとどまると予想される（吉村 2011・2012）。

## 3．地下式横穴墓における女性への武器副葬

古墳被葬者の性別と副葬品、とりわけ武器類の中には明瞭な性差をみせるものがある。古墳時代を通じて、日本列島のほとんどの地域で、鏃、槍、矛は女性に副葬されることが少なく、また甲冑は男性に帰属することなどがあきらかにされている（川西・辻村 1991、清家 1996・2010）。一方、地下式横穴墓においては、女性への鏃（鉄鏃・骨鏃）、刀剣類の武器副葬事例が広く認められるとともに、その事例が 5、6 世紀を通じて存在している。女性の単独埋葬（図 12・13）、被葬者が複数でその代表者の女性にともなう場合（図 8・9）と、それ以外の女性被葬者にともなう場合がある。鏃においては、数本（1 ～ 4 本）の副葬例がもっとも多いが、5 本以上、さらには二桁を超える多数副葬例（図 10）も散見される。一方、刀剣については、6 世紀末までの例がある。中期以降の複数刀剣副葬事例は、宮崎平野部と内陸部の西諸県地域で 5 例認められる。日本列島の他地域において女性の地域首長への副葬が 5 世紀後葉まで、小首長層において 6 世紀中葉までに終焉すること、中期において女性小首長への副葬が 1 本にとどまるという状況と大きな差異を示している。このようなことから、地下式横穴墓が築造される社会においては、女性の武装、戦闘への参加、また一定程度の戦闘指揮への関与があったと考えられる（吉村 2016）。

## 4．地下式横穴墓出土の甲冑

古墳時代中期の地下式横穴墓から、多くの甲冑が出土していることが早くから注目を集めてきた。甲冑は武器・武具としての側面だけでなく、威信財としての性格も併せもち、副葬品の階層性のなかでも鏡に次いで上位に位置づけられる。

地下式横穴墓出土甲冑の多くは宮崎平野部（西都市、国富町、宮崎市）、内陸部のえびの市域に集中して

いる（図 1）。

平野部の甲冑出土地下式横穴墓は基本的に単体埋葬である。対して、内陸部の地下式横穴墓では、島内 81 号墓が単体埋葬であるものの、それ以外は基本的に複数埋葬である。

平野部の事例は宮崎平野、志布志湾沿岸とも人骨情報が乏しく、性別･年齢など詳細は不明である。一方、内陸部、加久藤盆地の地下式横穴墓の事例では、小木原 3 号墓が 2 体埋葬で、初葬とみられる奥壁沿いの被葬者（性別不明）足許に横矧板鋲留短甲が置かれる。島内地下式横穴墓群では、複数埋葬墓の 62 号墓（3 体埋葬）では初葬の成年男性に横矧板鋲留短甲が帰属する。単独埋葬の 81 号墓は成年男性である。一方、複数埋葬でも 21 号墓では、横矧板鋲留短甲が初葬の男性（成年～熟年）に、横矧板鋲留衝角付冑が 2 番目埋葬の男性（成年）にともなう。また、76 号墓は人骨が遺存しないが、竪坑埋土の観察から 3 体埋葬と想定される。短甲と冑の配置が異なり、横矧板鋲留短甲は初葬に、三角板革綴衝角付冑は 2・3 番目埋葬にともなうと推定される。

古墳の副葬品中、甲冑は男性に帰属する遺物であるとされ（川西・辻村 1991、清家 1996）、地下式横穴墓においても基本的に同様の状況が認められる。

ただし、島内 115 号墓（図 11）については疑問が残る。報告書では配置的に冑と馬具（轡・辻金具・鉸具）は 1 号人骨（成年女性）に、大刀・小刀は 2 号人骨（小児 6 歳）にともなう可能性があるが、年齢的に 3 号人骨（熟年男性）所有と考えるのが妥当としている。3 号人骨は玄室主軸と平行せず、斜め（頭部側を左壁寄り）の状態で検出されている。斜めの遺体配置は不自然であり、埋葬当初は主軸と平行に置かれ、4 号人骨追葬時に上半身が左に押しやられたと考えることもできる。馬具と冑が 3 号人骨帰属なら、3 号人骨埋葬時に玄室左奥隅の空間に置かれたことになる。ただし、その場合、2 号･3 号人骨間に広く間隔が空く。この間隔は、3 号人骨の足の位置が、すでに置かれていた冑により規制された結果とみることも可能である。

## 【おもな参考文献】


川西宏幸・辻村純代　1991「古墳時代の巫女」『博古研究』2　1-26 頁

清家　章　1996「副葬品と被葬者の性別」『雪野山古墳の研究』考察篇　175-200 頁

清家　章　2010『古墳時代の埋葬原理と親族関係』大阪大学出版会

田中良之　1995『古墳時代親族構造の研究 －人骨が語る古代社会－』柏書房

田中良之　2008『骨が語る古代の家族 －親族と社会－』吉川弘文館

田中良之・舟橋京子・吉村和昭　2012「宮崎県内陸部地下式横穴墓被葬者の親族関係」『九州大学総合研究博物館研究報告』第 10 号　127-144 頁

北郷泰道　1994「武装した女性たち －古墳時代の軍事編成についての覚書－」『考古学研究』第 40 巻第 4 号　133-141 頁

北郷泰道　2006「再論・南境の民の墓制」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第 2 号　1-12 頁

吉村和昭　2011「宮崎県西諸県地域における地下式横穴墓の墓群形成と埋葬原理 －立切地下式横穴墓群を対象として－」『九州考古学』第 86 号　41-64 頁

吉村和昭　2012「地下式横穴における埋葬原理と女性への武器副葬」『南九州とヤマト政権 －日向・大隅の古墳－』（大阪府立近つ飛鳥博物館平成 24 年度秋季特別展図録）　147-155 頁

吉村和昭　2015「西都原古墳群の甲冑」『西都原古墳群　総括報告書』（平成 24 ～ 26 年度西都原古墳群基礎調査報告書）　宮崎県教育委員会　115-130 頁

吉村和昭　2016「地下式横穴墓における女性と未成人への武器副葬」『考古学は科学か　田中良之先生追悼論文集』下　中国書店　727-744 頁

吉村和昭　2016「九州南部の甲冑と甲冑出土古墳」『古代武器研究』Vol.12　61-76 頁

1. 西都原
2. 下那珂馬場
3. 宮崎市村角
4. 下北方
5. 木脇塚原
6. 六野原
7. 本庄
8. 高城牧ノ原
9. 神領 10 号墳
10. 唐仁大塚
11. 岡崎 15 号墳
12. 祓川
13. 小木原
14. 島内
15. 溝下

● 古墳・古墳群
△ 地下式横穴墓
■ 地下式板石積石室墓？

0　20 km

図１　九州南部甲冑出土遺跡分布図

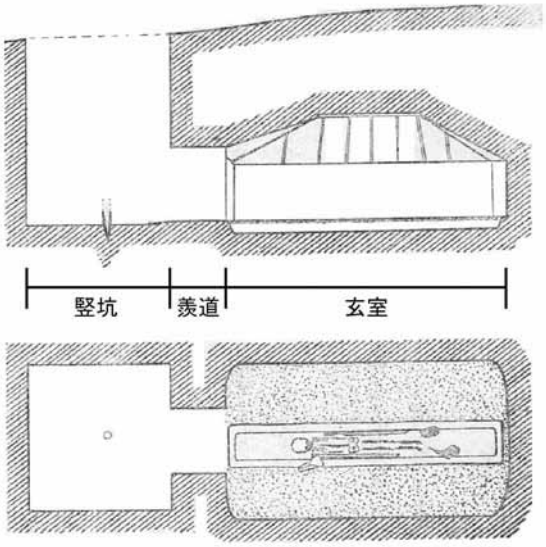



図２　地下式横穴墓の構造

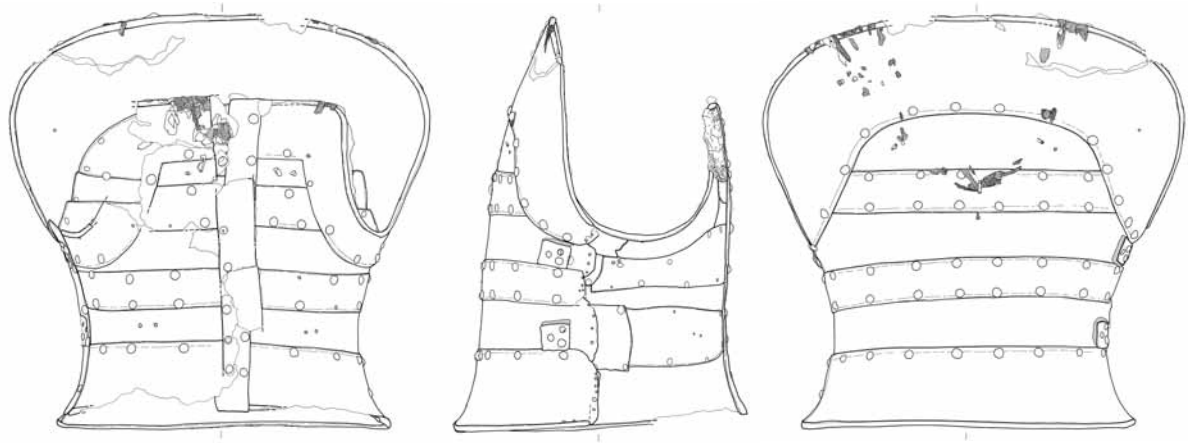


図３　西都市 西都原４号地下式横穴墓１号短甲

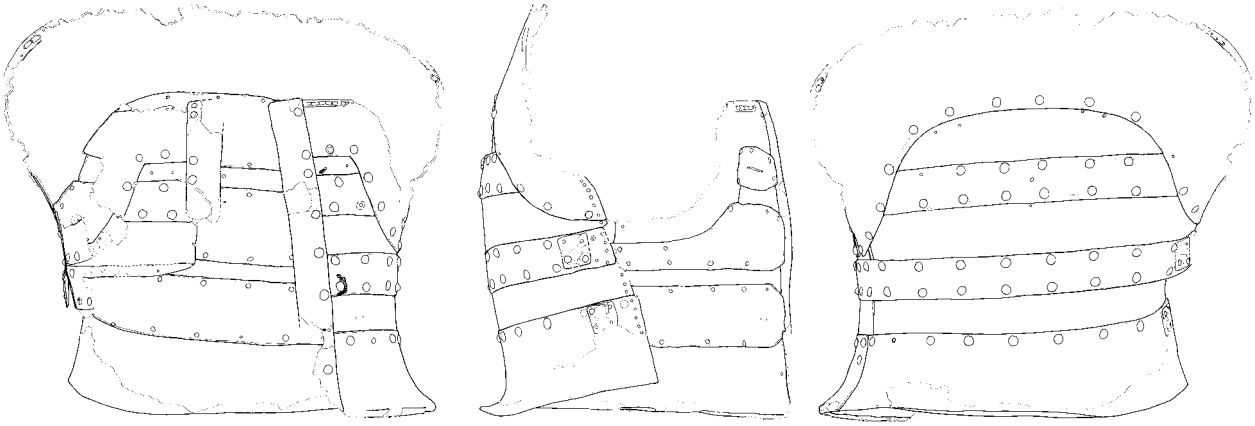


図４　えびの市 小木原１号地下式横穴墓出土短甲

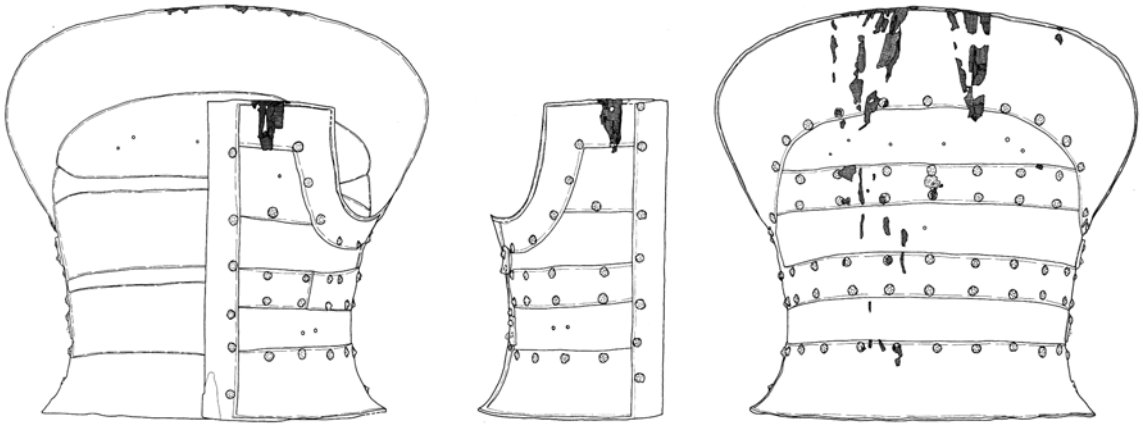


図５　えびの市 島内 21 号地下式横穴墓出土短甲

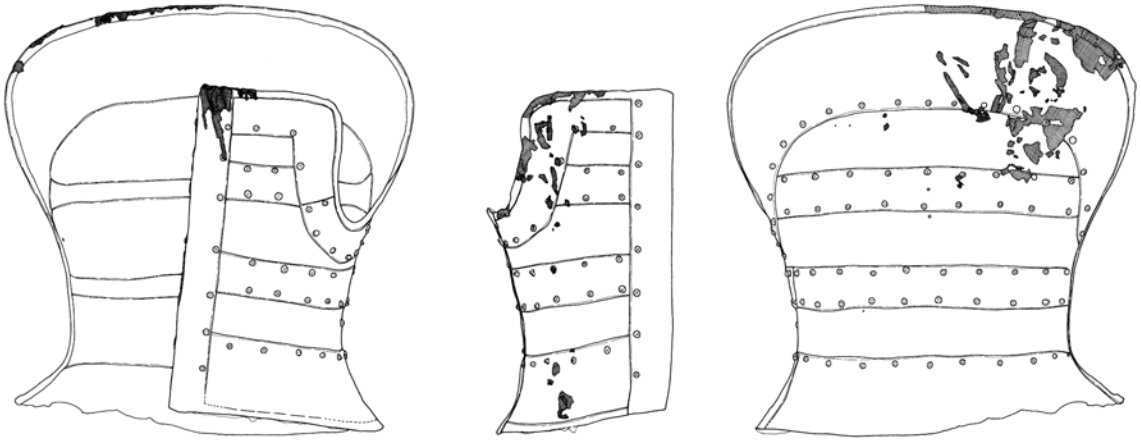
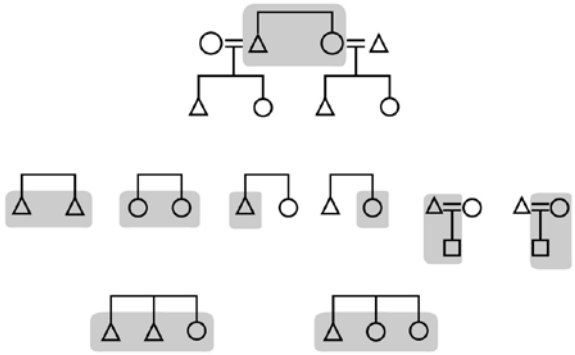
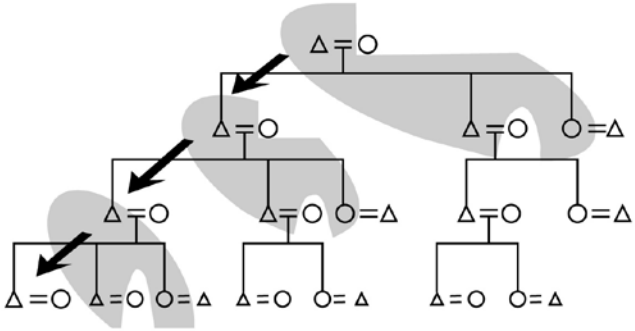


図６　えびの市 島内 62 号地下式横穴墓出土短甲



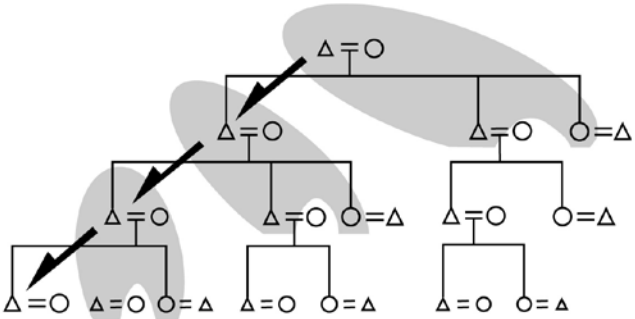
基本モデルⅠ

**古墳時代前半段階**（3 世紀～５世紀前半）
複数埋葬ではいずれも血縁者が葬られる。
世代構成は同世代の血縁者、キョウダイが基本。
複数世代の場合、父子・母子のどちらもある。
双系の親族関係。



基本モデルⅡ

**古墳時代後半代**（５世紀後半～）
複数埋葬では二世代構成が基本。いずれも血縁者が葬られるが、初葬、第一世代は成人男性に限られる。第二世代は（次の家長を含まない）その子供たち。各世代とも配偶者は含まれない。
造墓は男性家長の死を契機におこなわれる。
父系の親族関係。



基本モデルⅢ

**古墳時代後期**（6 世紀代）
古墳時代後期（6 世紀代）から認められる。
二世代構成で、第一世代は男女（夫婦）、
第二世代は基本モデル「のまま（それぞれの配偶者は含まない）。
父系の親族関係。

図７　基本モデルⅠ～Ⅲ（田中 2008 を改訂）

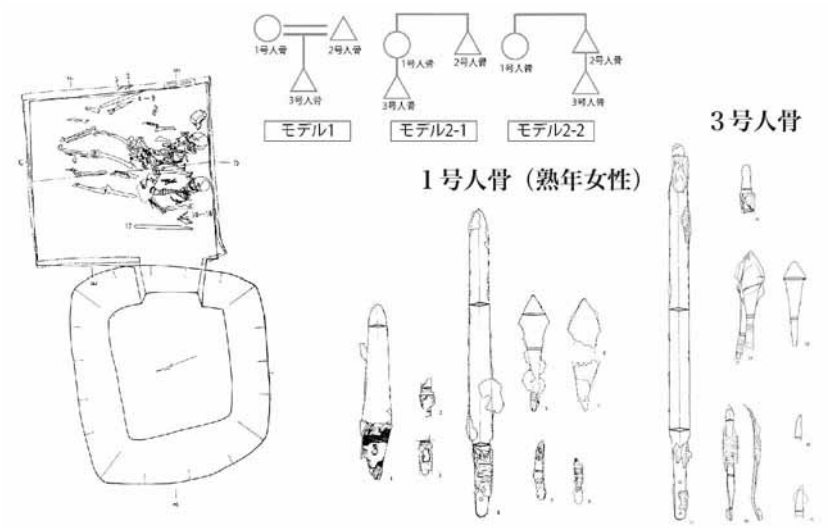



図８　高原町 立切４号地下式横穴墓（初葬に主要武器がともなう：女性）

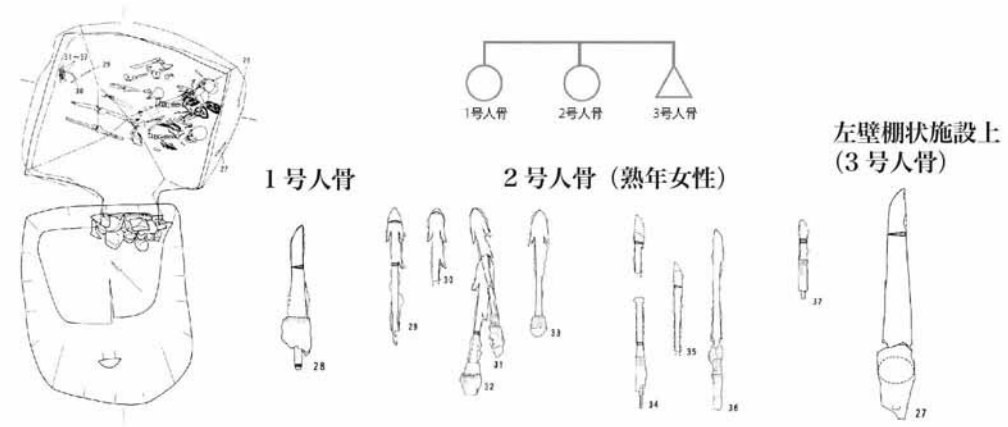



図９　高原町 立切 40 号地下式横穴墓（２番目以降に主要武器がともなう：女性）

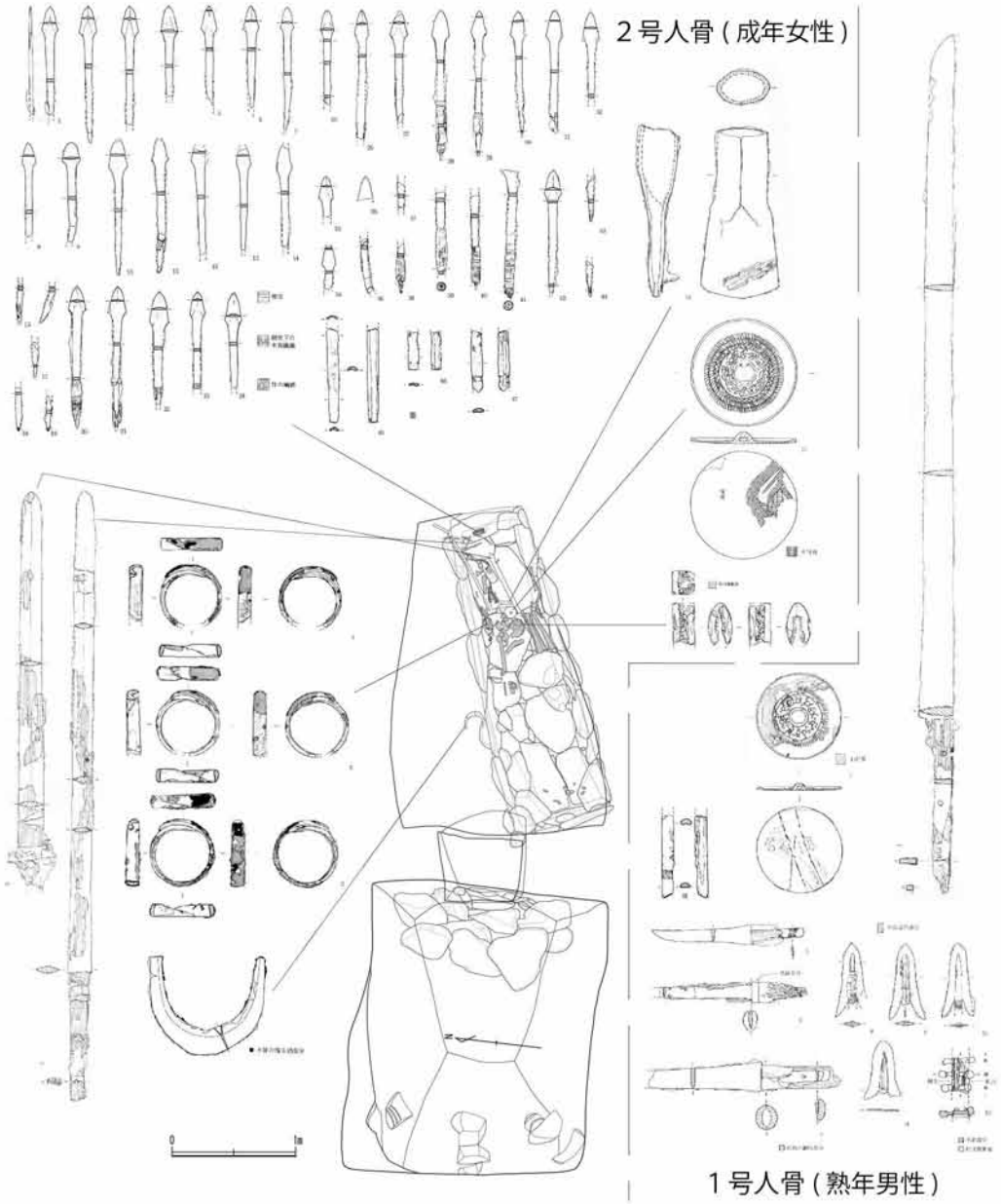



図 10　国富町 市の瀬５号地下式横穴墓（男女の主要武器が拮抗）

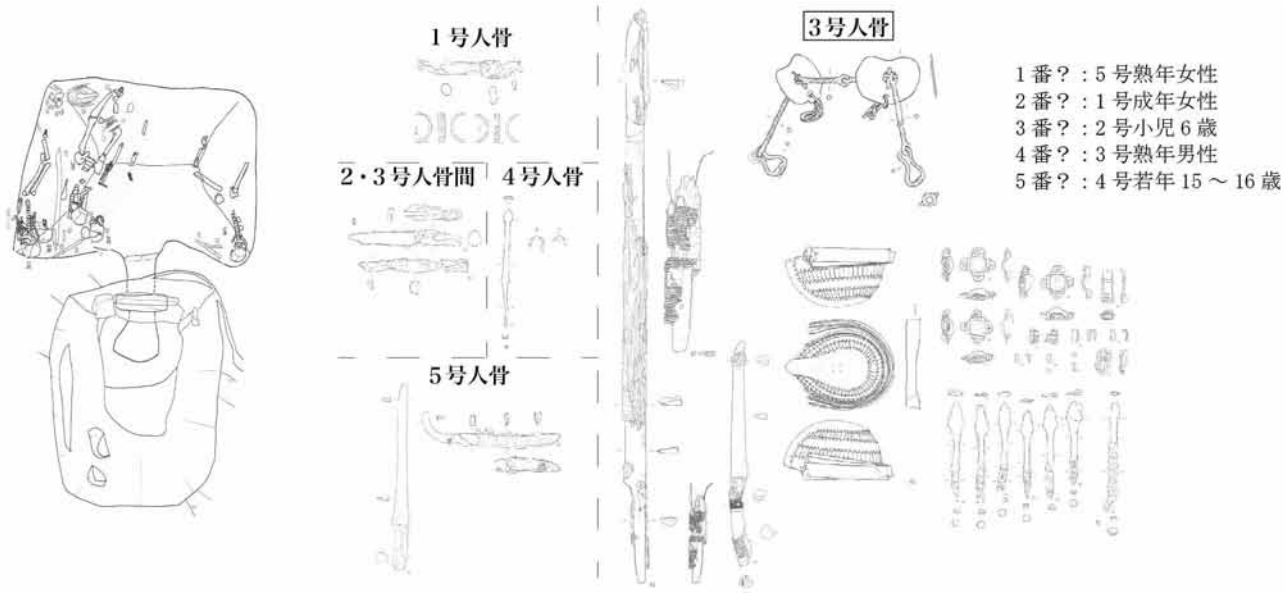



図 11　えびの市 島内 115 号地下式横穴墓（２番目以降に主要武器がともなう？：男性）

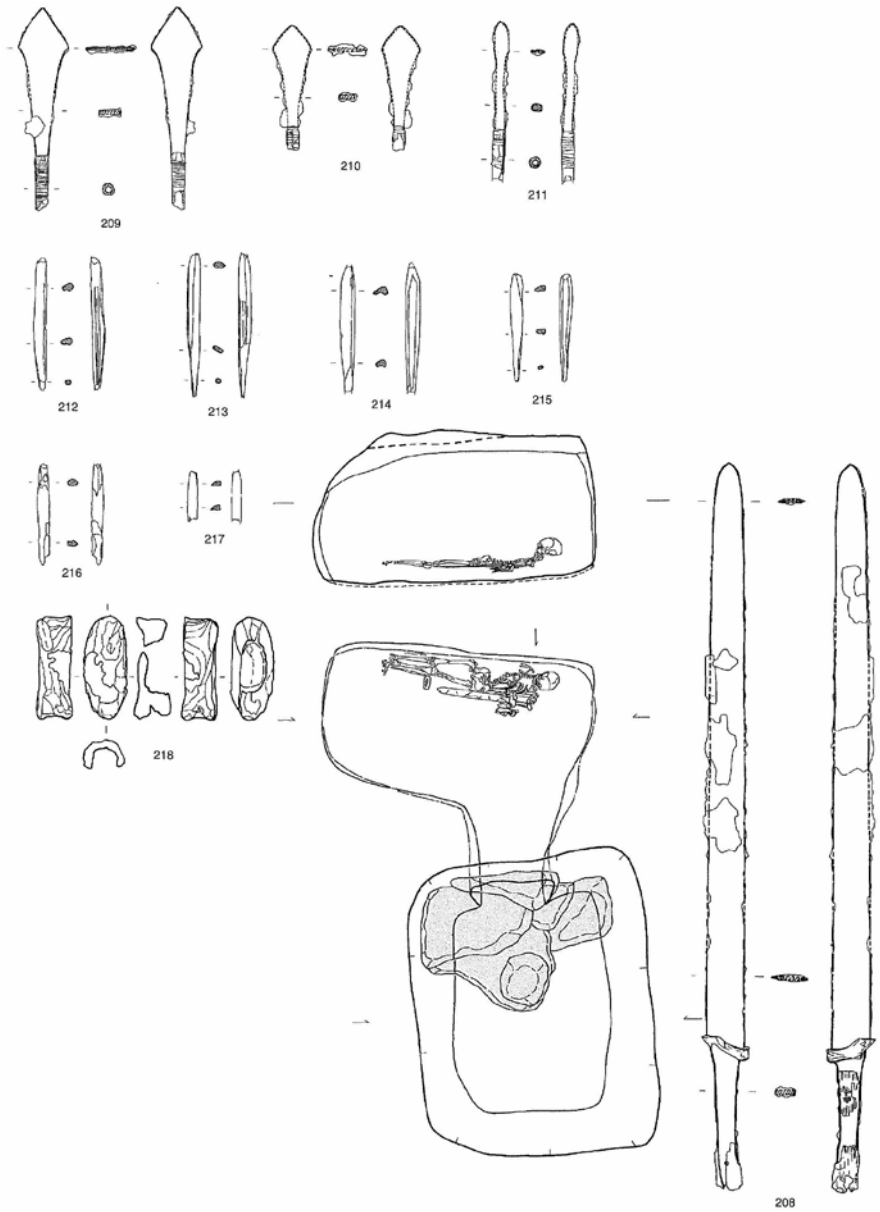



図 12　都城市 築池 2001-3 号地下式横穴墓（女性の単独埋葬）

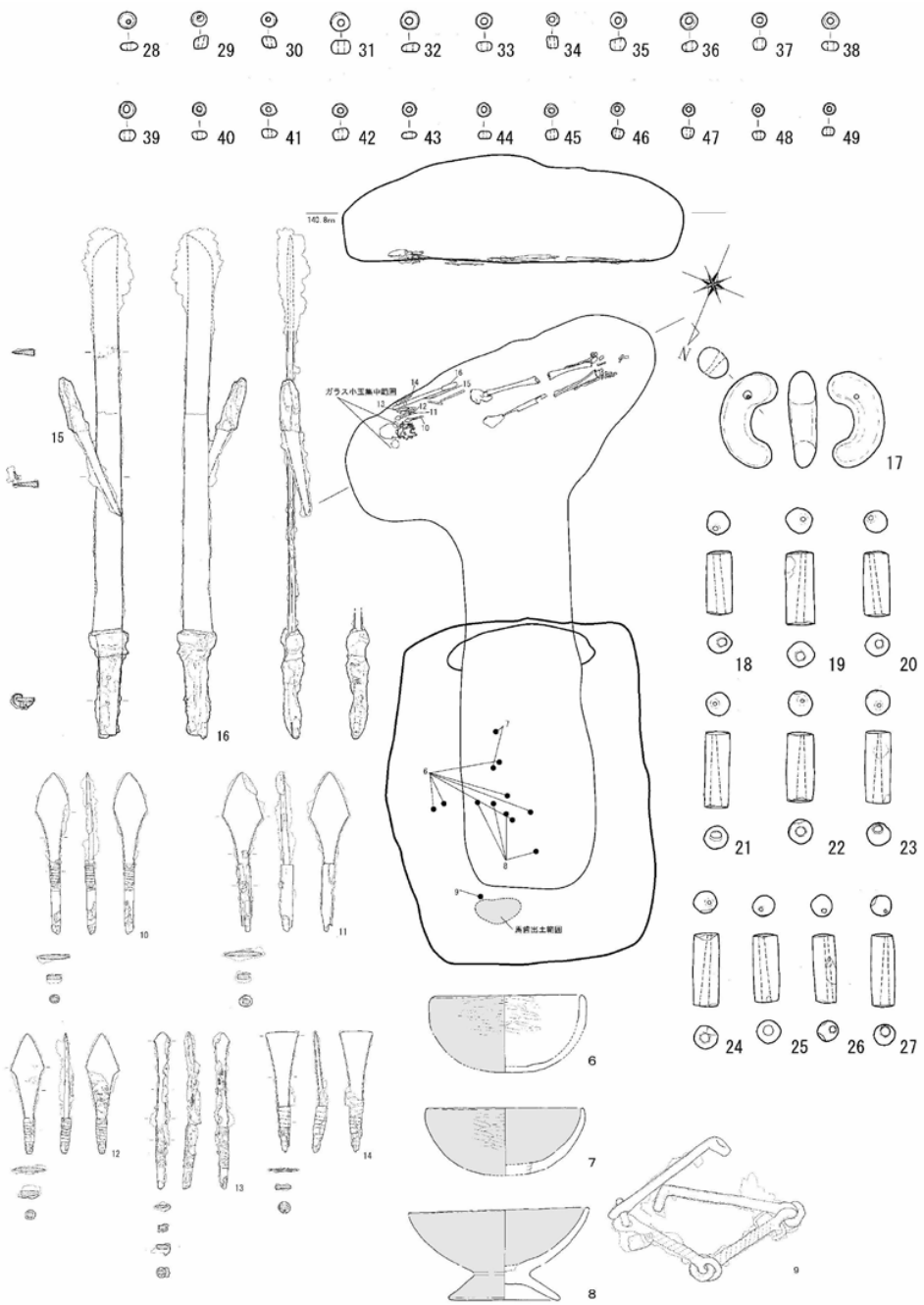


図 13　都城市 築池 2009-SX01 地下式横穴墓（女性の単独埋葬）

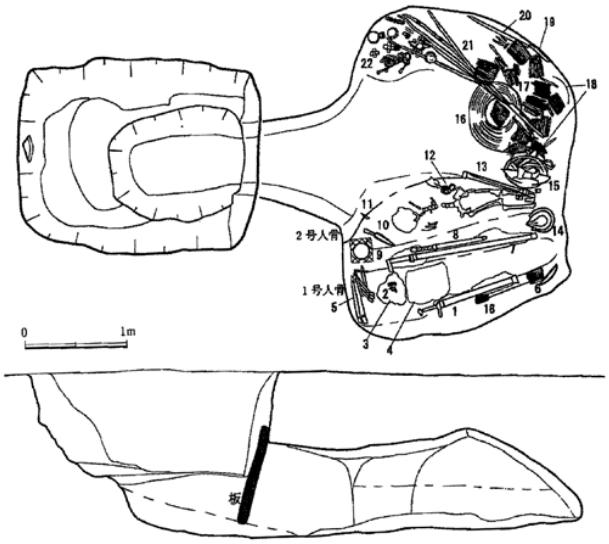



図 14　えびの市 島内 139 号地下式横穴墓

# 南九州・大隅諸島域の古墳時代人

鹿児島女子短期大学　竹中正巳

## 1．はじめに

古墳時代の南九州でも、古代国家形成の一つの象徴といえる前方後円墳が造営されている。しかし、前方後円墳をはじめとする高塚墳は、南九州の南端までは分布していない。大隅半島側は中部までの範囲に分布するだけである。また、高塚墳は大隅諸島以南の琉球列島に造営されていない。南九州には、これら高塚墳とともに在地の墓制である地下式横穴墓、地下式板石積石室墓および立石土坑墓が分布し、それぞれの墓から人骨が出土している。各タイプの墓の中から人骨は出土するが、地下式横穴墓からの出土数が他の墓からを圧倒する。地下式横穴墓から出土する人骨は保存状態が良好なものも多い。また、大隅諸島の種子島からは土坑墓や覆石墓から人骨が出土している。

南九州の古墳時代人骨については、形質（顔つきや体つき）に地域差が認められ、内陸部の集団は縄文人的特徴を色濃く残し､宮崎平野部は高顔･高身長と渡来人による遺伝的影響が及んでいるとされてきた（松下 ,1990)。そんな中、竹中（2001）は内陸部の宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群から出土した約 100 体の人骨の研究から、島内は渡来系弥生人の遺伝的影響を内陸部の集団の中では強く受けている可能性を示した。また、薩摩半島の南端の成川遺跡に埋葬された人々は短頭・低顔の南西諸島タイプと指摘されている（内藤 ,1984)。

南九州の人類史を解明する上で、一つの鍵になる鹿児島県指宿市山川成川に所在する成川遺跡からこれまで出土した人骨は保存状態が悪く、形質の再検証や DNA 分析に向けたサンプリングができる状態ではなかった。そのため、竹中らは 2019 年 8 月から 9 月にかけて、成川遺跡の発掘を行った。幸運にも、2 基の古墳時代の墓を検出し、1 基からは頭蓋も出土した。今後も、成川遺跡の発掘調査を継続し、古墳時代の南九州の人々に形質変異があったのか、形態と遺伝子分析から検討し、縄文人、渡来系弥生人や種子島広田弥生人など大隅諸島とはじめとする南西諸島の先史人との繋がりを検討していく。

今回の発表では、南九州から大隅諸島地域の古墳時代人骨を紹介し、我々の近年の発掘調査の成果も紹介しながら、古墳時代の南九州から大隅諸島にかけての人の様相を考えてみる。

## 2．南九州古墳時代人の顔つきや体つき（図 1）

南九州の男性古墳時代人骨の研究から、山間部と宮崎平野部では形質に違いがあり、この地域の古墳人が３つのタイプに分けられることが指摘されている（松下､1990)。１）強い低･広顔傾向を示し､低身長で、西北九州人に近い「南九州山間部タイプ」、２）短頭型で、狭・高顔傾向を示し、高身長であり、北部九州弥生人に近い「宮崎平野部Ｉタイプ」と３）狭・高顔ではあるが、中頭型で眼窩や鼻部の高径が低く、周辺にこれと類似する例を見出せない「宮崎平野部Ⅱタイプ」にである。

宮崎平野部と南九州山間部の古墳時代人には形質差（顔つきや体つきの差）があることが知られている。縄文人的特徴を残す南九州山間部に対し、宮崎平野部の古墳時代人には、渡来人の遺伝的影響が強く現れていることが理由とされている。南九州山間部の古墳人は西北九州弥生人に極めて類似している（松下、1990)。西北九州弥生人は、頭蓋計測値、頭蓋形態小変異の分析のいずれもが縄文人に類似し、体質的にも文化的にも縄文人的色彩が遅くまで持続した集団と考えられている（内藤、1984；Saiki et。al、2000)。

1994 年以降、南九州山間部、加久藤盆地に位置する島内地下式横穴墓群（えびの市）から 200 体を越える古墳時代人骨が出土した。「島内地下式横穴墓群」の成人骨は周辺の南九州山間部の古墳人と同様の特徴を多く持つ。しかし、個別にみていくと、非縄文人的特徴を持ち合わせている個体もかなり存在する。サイズの比較的大きな脳頭蓋、頭蓋長幅示数が中頭型、広鼻、前頭部の突出、鼻骨の湾曲、大腿骨の柱状性などが、周辺の南九州山間部の古墳人と同様の特徴である。島内の上顔高、眼窩高が高い点などは異なる特徴である。

島内は、頭蓋計測値の分析結果でも西北九州弥生人とやや異なり、頭蓋形態小変異の出現頻度の分析結果からも類似しない。この頭蓋計測と頭蓋形態小変異の分析結果は、島内の人々が、南九州の山間部の中で異なった存在であり、渡来系の遺伝子をある程度受け入れた集団であるとの解釈を可能にすると考えられる。

島内からは甲冑や蛇行剣など、貴重な副葬品が多数出土している。それらは畿内経由でもたらされた可能性も考えられる。人の動きや繋がりも物の動きと同じ可能性も十分にある。こうした脈絡に沿って考えていけば、島内の人々に渡来人的な遺伝子が周辺の山間部の人々に比べより強く及んでいて、渡来人的な体質がより強く現れていてもおかしくはない。

また、「大隅半島」の古墳時代人は、南九州の山間部や宮崎平野部と異なる特徴を示す。大隅半島は顔の高さでは南九州山間部を上回り、宮崎平野部と同様の傾向を示す。しかし、鼻部は、南九州山間部と同様、低眼窩、広鼻であり、宮崎平野部と異なる。人骨形質の特徴から考えると、大隅半島の古墳時代人には、南九州山間部よりも渡来人の遺伝的影響が及んでいるが、宮崎平野部の古墳時代人ほどではないと考えられる。

「薩摩半島の南端から、南西諸島」にかけての人々は、短頭･低顔が特徴である。種子島以南の短頭･低顔･低身長の古墳時代人と薩摩半島南端の成川遺跡（指宿市）に埋葬された人々は短頭・低顔という特徴で共通する。「南西諸島タイプ」と指摘されている（内藤 ,1984）。

## 3. 南九州古墳時代人の生活誌

### (1) 糞石からわかること

宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群 69 号墓 2 号人骨（女性・壮年）の骨盤内から骨盤外には灰白色の固形物が遺存していた。固形物は、下行結腸、S 状結腸、直腸に相当する場所から、肛門外に続いており、大便（糞石）であると考えられる。死亡時、大腸内に残っていた大便のかなりの量が、死亡後の腐敗に伴う腹部膨満による腹腔内圧力の亢進と肛門部の筋弛緩によって、肛門外へ押し出されたものと推測できる。被葬者個人のものと特定できる状態での糞石の出土は南九州の古墳時代人骨で初めてである。日本列島へ範囲を広げても、縄文時代の埋葬遺跡から出土する糞石は知られているが、古墳時代での類例を我々はまだ知らない。島内 69 号墓 2 号女性人骨の糞石の分析から、アブラナ科、イネ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属などの野菜類または薬用植物が摂食されていたことが推定された（金原・金原、1999）。南九州の古墳時代人の食生活の一端が明らかにされた。さらに、糞石にアブラナ科や樹木、タンポポ亜科の花粉が含まれていることから、埋葬された人物が死亡した季節が春であった可能性も指摘されている（金原・金原、1999）。

さらにその後の発掘調査で、島内地下式地下式横穴墓群からは、89 号墓 2 号人骨（女性・壮年）、117 号墓 3 号人骨（男性・壮年）からも糞石が出土している。糞石の研究から、亡くなる数日以内の食べ物や健康状態、亡くなった季節などを明らかにできる可能性がある。

### (2) ハエ蛹殻

宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群 113 号墓と 114 号墓からは大量のハエ蛹が出土した。出土したハエ蛹は、遺体に産み付けられたハエの卵がどの古墳時代人骨のものか特定できる大変貴重な例である。このハエ蛹の研究が進めば、遺体の埋葬過程に関連する新たな事実が明らかにされ、亡くなってからどれくらいの時間が経過した後に遺体を地下式横穴墓に納めたのか、また殯についても考察できる可能性がある。今後の研究の進展に期待したい。

### (3) 歯の摩耗

島内地下式横穴墓群（宮崎県えびの市）47 号墓から出土した 1 号人骨（男性・壮年）の上顎前歯舌側面に特殊摩耗 [LSAMAT（Lingual Surface Attrition of Maxillary Anterior Teeth）] が認められた。磨耗は前歯部だけでなく、左右第 1 大臼歯間で確認できる。磨耗痕の認められる歯の舌側面は、ほとんどが象牙質まで露出している。本個体の咬合は鉗子状であり、この磨耗痕は上顎歯の被蓋が深いために起こる

咬耗とは異なる。このような特殊磨耗が生じる一つの可能性として、食事や作業の際に、上顎歯・硬口蓋と舌との間に植物など鞣す物を挟み、舌や手を使い、それらを押し引きし、しごく行為を行っていたことが考えられる。

地下式横穴が分布する南九州山間部、宮崎平野部（宮崎県国富町川原崎地下式横穴墓出土人骨）、大隅半島（鹿児島県高山町北後田古墳群 1 号地下式横穴墓 1 号人骨）の 3 地域すべてに、LSAMAT の認められる人骨を確認した。LSAMAT の認められる人骨が出土するということは、植物などをしごく行為が、地下式横穴墓分布域で行われていたことを推測させる。地下式横穴を営んだ南九州の古墳人の日常作業、食生活の一端がうかがえる。

（4）地下式横穴墓分布域における抜歯風習

地下式横穴墓は現在の宮崎県南部から鹿児島県大隅半島にかけての地域に分布する。この墓制は、在地の人々が営んだ墓制と考えられている。地下式横穴墓の分布域の中でも南九州山間部の地下式横穴墓は調査例が多く、多数の保存良好な人骨が出土している。それに比べると、宮崎平野部や大隅半島では調査例が少なく、人骨の出土数も少ない。

古墳時代の南九州を特徴づける墓制である地下式横穴墓から出土した抜歯人骨の数は、南九州山間部のえびの・小林盆地から出土した人骨に 3 例、山間部と宮崎平野部の中間に位置する都城盆地から出土した例が 1 例、宮崎平野部から出土した例が 1 例、そして大隅半島の鹿児島県大崎町飯隈地下式横穴墓群 22 号墓人骨（男性・熟年）のを加え、大隅半島から出土した人骨が 3 例の 8 例となる。

多数の人骨が出土している南九州山間部のえびの・小林盆地に比べ、宮崎平野部や大隅半島は出土人骨数の割に抜歯人骨の割合が高い。えびの･小林盆地での抜歯人骨の割合は、ほぼ 0 %に近い値となる。土肥･田中（1988）によれば、古墳時代の抜歯は上顎第 1 小臼歯または上顎側切歯の片側性抜歯が多く、抜歯回数は 1 回、施行年齢はほぼ成年期と推定されている。えびの・小林盆地から出土した人骨の抜歯対象歯は下顎側切歯や下顎第 2 小臼歯であり､古墳時代の抜歯に多い抜歯部位ではない。これらのことから考えると、南九州山間部のえびの・小林盆地でのに古墳時代の抜歯風習が存在したとは言えない（竹中ら，2005）。しかし、地下式横穴墓分布域の中でも、宮崎平野部、都城盆地や大隅半島には飯隈の事例が加わったこともあり、抜歯風習が存在した可能性は考えてよいと思われる。

風習的抜歯は、縄文時代後晩期の日本列島本土で、成人、結婚、服喪など人生儀礼として、盛んに行われ、上顎左右の犬歯と下顎の前歯がよく抜歯された。古墳時代の抜歯風習は、縄文時代や弥生時代の風習的抜歯とは抜歯の意義や抜歯の部位が異なる（土肥・田中，1988）。地下式横穴墓分布域の宮崎平野部、都城盆地や大隅半島の抜歯例をみても、縄文・弥生期とは異なり、古墳時代の新たな風習的抜歯の部位と同じである。

地下式横穴墓も、副葬品や埋葬様式、埋葬儀礼などから考えると、古墳文化の影響を受けている。地下式横穴墓分布域の中でも、宮崎平野部、都城盆地や大隅半島は前方後円墳や多数の高塚墳が存在する。前方後円墳と地下式横穴墓群との関係は、宮崎平野や大隅半島の平野部から山間部に向かうにつれ疎遠になっていく（北郷，1986）。前方後円墳は、えびの･小林盆地には認められない。このような脈絡から考えると、新たな意味の抜歯風習が古墳時代の宮崎平野部、都城盆地や大隅半島に伝播して来て、これらの地域の地下式横穴墓を営んだ中小豪族の人々が風習的抜歯を行っていたとしても不思議ではない。

(5) 受傷痕からみた南九州古墳時代人社会

宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群 99 号墓 2 号人骨（男性・壮年）には斬・切・刺創痕が 9 ヶ所も確認できた。創痕は、頭蓋（2 ヶ所:左下顎体、後頭骨）、右鎖骨（1 ヶ所）、左肩甲骨（1 ヶ所）、左肋骨（1 ヶ所）、右寛骨（1 ヶ所）、左寛骨（1 ヶ所）、右脛骨（1 ヶ所）、右腓骨（1 ヶ所）に認められた。いずれの傷も、受傷後、治癒機転が進展した痕は見い出せない。従って、ほぼ即死の状態であったと推測される。また、9 ヶ所も傷を受けていることから、この壮年男性を殺害した人物は強い殺意を持っていたはずである。受傷部位のほとんどは、被害者である壮年男性と加害者が相向かいで戦っていたことを想像さ

せる。男性の後頭骨、左肋骨、左寛骨に残る傷は、いずれも創傷痕の両端が鋭く切れ込んで終わっており、剣によって突き刺された傷であると判断される。剣は両刃の武器で突く機能と斬る機能を持つ。残る 6 ヶ所の傷痕も、剣によるものと考えて、おかしくはない。

島内をはじめとする地下式横穴墓群に副葬された鉄器の数を考えると、かなりの数の鉄製武器が古墳時代後期の南九州に流通していたはずであり、加害者は鉄剣を用いてこの壮年男性を殺害したと推定してもよいのではなかろうか。

竹中ら（2010）によれば､これまでに出土した南九州の古墳時代人骨で受傷人骨は 6 例しかない（表 1)。その内の 5 例が宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群からの出土である。島内からは、これまでに 180 体を超える人骨が出土しており、受傷人骨の割合は約 2.8% 程度となる。受傷人骨の多数報告されている弥生時代の北部九州でも､受傷例が出土人骨や墓の中で占める割合はおそらく 1% にも満たないと言われている（中橋，1996)。集団間の戦争が激しかった弥生時代の北部九州でさえ、受傷人骨の占める割合は 1% 程度とのことであり、島内地下式横穴墓群の受傷人骨の占める割合は明らかに高い。

これまで島内の受傷者について、集団間の戦争・戦闘による犠牲者である可能性だけではなく、事故や私怨による傷害行為を受けた可能性が提示されてきた（竹中，2001)。しかし、近年の新たな受傷人骨の出土によって、これまでの受傷人骨の報告例も含め、戦闘行為の犠牲者と考えた方がよいことは明らかである（竹中ら，2010)。島内地下式横穴墓群は甲冑をはじめとする多数の武具・武器の副葬等から、周辺の地下式横穴墓群と比べ、特殊性が指摘されてきた。多数の地下式横穴墓が調査されているが、殺傷痕が認められる人骨が多数出土した墓群は島内地下式横穴墓群だけである。島内を営んだ人々が他の集団と戦わざるを得ない状況下にあり、戦いの犠牲者がこのように存在したしたことを物語っている。

島内から南方になるが、錦江湾沿岸地域には地下式横穴墓は築かれない。島内地下式横穴墓群を営んだ人々が戦わざるをえず、戦闘行為による犠牲者がでた理由として、錦江湾奥の地下式横穴墓を造らない人々と対峙する前線基地としての島内集団の政治的特殊性が理由として考えられる。

(6) 使用墓の最終儀礼としての人骨移動風習

また、近年の地下式横穴墓の骨考古学的発掘成果としては、7 世紀前後の地下式横穴墓から最終埋葬のあとの集骨があげられる。2002 年の 8 月には、宮崎県西都市常心原地下式横穴墓群 5 号墓の発掘調査が行われ、ここでも最終埋葬後、再度、玄室を開けて 3 体が玄室中央に集骨されていた。また、宮崎県国富町義門寺地下式横穴墓群 1 号墓の発掘調査で、最終埋葬後に再び玄室を開け、埋葬してあった 2 体の人骨を 1 箇所に集骨した例を明らかにできた。さらに、南九州の内陸部に所在する宮崎県都城市築池地下式横穴墓群 2003-2 号墓からも、墓使用の最終的な儀礼行為として、白骨化した人骨と副葬された平瓶とを動かすという行為が行われた可能性が考えられた。

加えて、都城市菓子野横穴墓群やえびの市島内地下式横穴墓群でも、同様の遺体が白骨化した後の骨移動が行われたことが確認されている。使用墓の最終儀礼として白骨化した人骨を動かしたり集骨したりするという行為は、山陰や関東の横穴墓でも行われた儀礼行為である。古墳時代の地下式横穴墓分布域に、明らかに最終埋葬後の遺体白骨化後の骨移動・集骨が行われていたことがわかる。

図 1　南九州古墳時代人（男性）
（上左：南九州山間部　上中：宮崎平野部　上右：島内地下式横穴墓
下左：大隅半島　下中：種子島　下右：成川遺跡）
南九州山間部：島内地下式横穴墓群 89 号墓 3 号人骨（男性・熟年）
宮崎平野部：前の原地下式横穴墓群 3 号墓 1 号人骨（男性・若年）
島内地下式横穴墓：島内地下式横穴墓群 77 号墓 2 号人骨（男性・壮年）
大隅半島：飯隈地下式横穴墓群鷲塚地区 22 号墓人骨（男性・熟年）
種子島：上浅川伏石墓人骨（男性・熟年）
成川遺跡：2019-2 号墓人骨（男性・壮年）

表１　南九州における古墳時代の受傷人骨

| 出土地 | 遺跡名・人骨番号 | 性・年齢 | 受傷痕の認められる骨の部位 | 文献 |
|---|---|---|---|---|
| えびの市 | 島内地下式横穴墓群 87 号墓 1 号人骨 | 男性・熟年 | 骨盤下から破折した骨鏃 | 竹 中 ほ か (2001) |
| えびの市 | 島内地下式横穴墓群 89 号墓 1 号人骨 | 男性・熟年 | 前頭骨に陥没骨折 | 竹 中 ほ か (2001) |
| えびの市 | 島内地下式横穴墓群 99 号墓 2 号人骨 | 男性・壮年 | 頭蓋（2 カ所）、右鎖骨（1 カ所）、左肩甲骨（1 カ所）、左肋骨（1 カ所）、右寛骨（1 カ所）、左寛骨（1 カ所）、右脛骨（1 カ所）、右腓骨（1 カ所）に斬・切・刺創 | 竹 中 ほ か (2001) |
| えびの市 | 島内地下式横穴墓群 104 号墓 2 号人骨 | 女性・熟年 | 右頭頂骨ラムダ付近に刺創 | 竹中ほか (2010) |
| えびの市 | 島内地下式横穴墓群 126 号墓 2 号人骨 | 男性・壮年 | 前頭骨に陥没骨折 | 竹中ほか (2010) |
| 宮崎県国富町 | 常心原地下式横穴墓群 7 号墓 1 号人骨 | 男性・熟年 | 左ラムダ縫合上に陥没骨折 | 竹 中 ほ か (2007) |

# シンポジウム用語解説

**【古墳：こふん】**

古墳時代の大きな墳丘（ふんきゅう）をもつ墓のこと。古墳の墳丘の形は多様で、前方後円墳や円墳、方墳などがある。日本全国にみられるが、北海道や南西諸島では確認されておらず、東北地方北部や薩摩半島ではあまりみられない。なお、明確な墳丘をもたない横穴墓や地下式横穴墓も埋葬施設（遺体を納める施設）や埋葬法などに共通点がみられることから、広く「古墳」として一括することもある。

**【前方後円墳：ぜんぽうこうえんふん】**

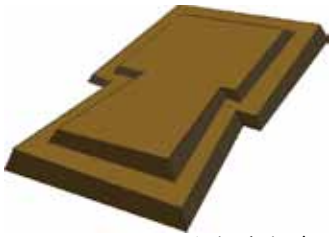
平面形が鍵穴状（かぎあなじょう）の墳丘をもつ古墳。大きく前方部と後円部に分かれ、多くは後円部に埋葬施設がある。全長が 100m を超える大型のものも多く、全国的に見ても地域ごとの古墳で最大規模のものは前方後円墳である。

前方後円墳

**【前方後方墳：ぜんぽうこうほうふん】**

前方部・後方部ともに方形の墳丘をもつ古墳。

円墳



前方後方墳

**【円墳：えんぷん】**

平面形が円形の古墳。古墳の最も一般的な形態で、前方後円墳と比べれば小型のものが多い。

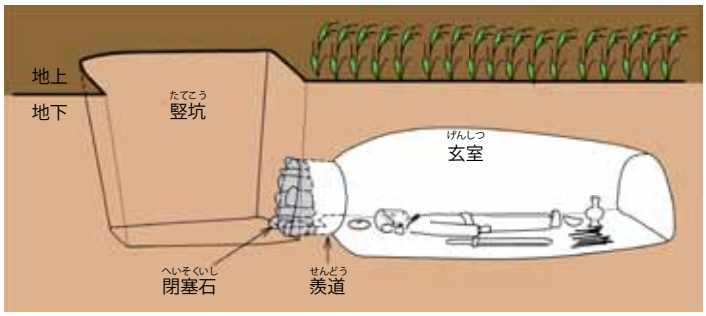
方墳

**【方墳：ほうふん】**

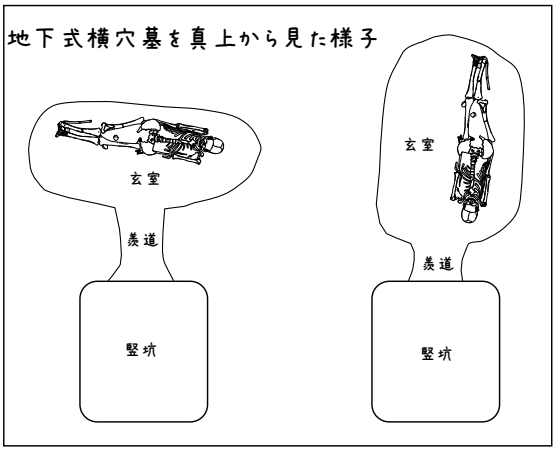
平面形が方形の古墳。円墳同様、前方後円墳と比べれば小型のものが多い。

**【地下式横穴墓：ちかしきよこあなぼ】**

古墳時代後半期の宮崎県・鹿児島県に特徴的なもの。埋葬施設が地下にあり、地面に深い竪坑（たてこう）を掘り、その壁に横穴を掘り進めて埋葬施設（玄室（げんしつ））とする。地表からはその存在がわからないので、盗掘を受けていないことがほとんどで、副葬品や被葬者などの配置がよくわかる。竪坑に対して玄室を縦に造るか横に造るかによって、妻入（つまい）り（縦）・平入（ひらい）り（横）と分類する。

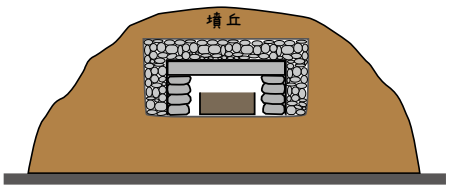



地下式横穴墓（横から見た図）



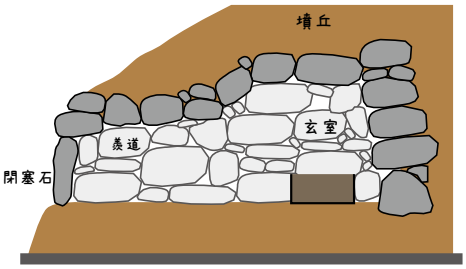

平入りの地下式横穴墓　　妻入りの地下式横穴墓

**【竪穴式石室：たてあなしきせきしつ】**
古墳の埋葬施設のひとつ。四方の壁には出入口はなく、上部の天井から出入りする。遺体安置後は上部を盛土するため、一度埋葬したら再び開けることは想定していない造り。



竪穴式石室

**【横穴式石室：よこあなしきせきしつ】**
竪穴式石室と対比して、横に出入口があり、羨道（せんどう）を通って奥に埋葬施設を設ける。



横穴式石室

**【箱式石棺墓：はこしきせっかんぼ】**
板石を箱状に組み合わせて石蓋で覆う、石棺墓の一種。

**【板石積石室：いたいしづみせきしつ】**
地面に穴を掘り、板石を壁面から中心に向けて積み重ねて蓋をする、石棺墓の一種。

箱式石棺墓

板石積石室

**【屍床：ししょう】**
地下式横穴墓や横穴墓などの玄室に設けられた、死者を安置する施設。

**【被葬者：ひそうしゃ】**
古墳に埋葬された人。

**【追葬：ついそう】**
埋葬施設に遺体を葬った後、同じ施設を再び開けて別の遺体を葬ること。地下式横穴墓からは複数の人骨が見つかる例もあり、追葬を想定した造りであると考えられる。

**【副葬品：ふくそうひん】**
古墳に葬る遺体とともに納められる品物のこと。

**【甲冑：かっちゅう】**
古墳時代の甲（よろい）は、三角形あるいは長方形の鉄板を革紐で綴じ合わせるか、鉄鋲で留める短甲（たんこう）と、小札（こざね）（小型の札状の鉄板）を革紐あるいは組糸で綴じる挂甲（けいこう）とがある。胴部のみをおおう短甲は４世紀代から６世紀の前半代まで用いられた。

**【土師器：はじき】**
素焼きの土器。弥生時代の製作技術の伝統を残した土器であるが、古墳時代以降のものは土師器と呼ぶ。

**【須恵器：すえき】**
灰色をした素焼きで硬質の焼き物。朝鮮半島から伝わったもので、窯を使って高温焼成している。

# シンポジウム 「古墳をつくった人々～墓制から文化の多様性を探る～」

コーディネーター：平山淳子（MRT 宮崎放送ラジオパーソナリティ）